

Title	Adhesion of the subacromial bursa may lead to subacromial impingement in patients with rotator cuff tears. Pressure measurements in 18 patients
Author(s)	町田, 明敏
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43910
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	町田 明 敏
博士の専攻分野の名称	博士 (医学)
学位記番号	第 17674 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科臓器制御医学専攻
学位論文名	Adhesion of the subacromial bursa may lead to subacromial impingement in patients with rotator cuff tears. Pressure measurements in 18 patients. (腱板断裂患者において、肩峰下滑液包の癒着が肩峰下インピンジメントを引き起こす可能性。18 人の肩峰下圧計測。)
論文審査委員	(主査) 教授 吉川 秀樹 (副査) 教授 越智 隆弘 教授 細川 互

論文内容の要旨

〔 目 的 〕

肩関節は、何らかの原因によりその運動が障害されると、上腕骨頭の腱板が肩甲骨の肩峰に衝突するインピンジメントが引き起こされるといわれている。肩峰下滑液包の癒着が肩峰下インピンジメントを引き起こす可能性を検討するために、肩峰下滑液包の癒着をリリースする前後で肩峰下接触圧を計測した。

〔 方法ならびに成績 〕

対象は、肩峰下滑液包の癒着のある腱板断裂患者 18 人、男性 8 人、女性 10 人で、平均年齢 62 歳 (53-71 歳)、平均罹病期間 12 ケ月 (2-60 ケ月)、術前平均 UCLA スコア-13.8 点 (11-18 点) で、いずれも著明な肩関節可動域制限は存在しなかった。感圧フィルムを肩峰下に挿入し、上肢を受動的に 100 度挙上したときの肩峰下接触圧および肩峰下接触面積を計測した。最初に、この測定方法の再現性を検討するため、一人の被験者に対し 10 回の計測を施行した。その結果、肩峰下接触圧は 1.21 (SD0.08) Mpa、肩峰下接触面積は 89 (SD7) mm² であり、信頼区間 (平均±2SD) は、十分小さく、この測定法が再現性を有すると判断した。全患者で計測した平均肩峰下接触圧は、肩峰下滑液包の癒着剥離前の 1.43 (SD 0.23) MPa が剥離後に 1.14 (SD0.35) MPa に低下した (p<0.001)。平均肩峰下接触面積も剥離前の 160 (SD81) mm² が剥離後に 80 (SD46) mm² に低下した (p<0.001)。

〔 総 括 〕

肩峰下滑液包の癒着剥離により、肩峰下接触圧および肩峰下接触面積が有意に低下することから、肩峰下滑液包の癒着が肩峰と腱板のインピンジメントを増強する可能性が考えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文では、肩峰下滑液包の癒着が肩峰下インピンジメントを引き起こす可能性を検討するため、圧力測定フィルムを用いて、肩峰下滑液包の癒着剥離前後で肩峰下接触圧と面積を測定した。対象は、術中肩峰下滑液包の癒着を認めた腱板断裂患者 18 例 18 肩とし、その内訳は男性 8 例、女性 10 例、手術時平均年齢 62 歳、平均罹病期間 12 ヶ月であった。断裂の原因は、外傷性 8 肩、非外傷性 10 肩で、断裂形態は、完全断裂 16 肩、不全断裂 2 肩であった。術中に肩峰下に圧力測定フィルムを挿入し、上肢を肩甲骨面で 100 度挙上し、その色濃度の変化から圧を計測した。この操作を肩峰下滑液包の癒着剥離前後に施行した。結果として、肩峰下接触圧は、癒着剥離前の 1.43 Mpa が、癒着剥離後に 1.14 Mpa に低下し、接触面積も剥離前の 160 mm² が剥離後 80 mm² に低下した ($p < 0.001$)。以上のことより、肩峰下滑液包の癒着が肩峰下接触圧や接触面積の増大、つまりインピンジメントの増悪因子となっている可能性が示された。このことに関する報告はこれまでなく、今後、肩峰下滑液包炎や腱板断裂の臨床、さらにはその原因解明への貢献が期待され、本論文は学位論文に値すると考えられる。